

英国の自由主義と賢女の群像

法政大学 経済学部教授 (客員) 渡部 亮

英国は、個人主義の国である。すでに 12 世紀頃から核家族化が進行し、西欧の中でも、いち早く個人主義の傾向が強まった。英国の若者は、高校を卒業するとすぐに自立し、大学生は奨学金とアルバイトで自活する。親のほうは「子供より飼い犬のほうが可愛い」などと皮肉を言う。

現代の資本主義は、この「元祖」自由主義の英国に源を発し、それが米国に渡っていっそう強化された。個人の所有欲を是認し、自由競争の結果によって生まれる貧富の差を容認する。当然ながら格差社会である。この英米流の資本主義を、アングロサクソン・モデルという。

今やグローバル化のもとで、アングロサクソン・モデルは日本を含むアジアにも波及し、各国とも対応を迫られている。日本では、大陸法(ドイツ法)をベースとする従来の商法が改正されて、英米法をベースとする新会社法が、今年の 5 月から施行されている。

さて英国の近代史には、何人かの傑出した女性が登場する。しかもそれぞれの女性が、強烈な個性を持っている。まずは 19 世紀初頭、知的快活さを発揮した小説家ジェイン・オースチンである。当時の英国では、旧来の貴族階級(土地持ち)と並んで、新興のブルジョア階級(金持ち)が力を持ち始めた。商売で財を成したブルジョアは田舎に引退し、年利 3% の永久国債(コンソル)を保有し、その利子収入で裕福な生計を立てていた。貴族階級の地位にはまだ及ばなかったが、保有する国債の多寡によって確実に年収(3%の利子収入)が計算されたから、その地位は強固であった。

英国では古来、遺産相続が長男に限定される制度(長男子限定相続制度ないし継嗣相続制度)

が存在した。この継嗣相続制は、ほかの欧州諸国には見られない制度であり、貴族階級の拡散による財産の希薄化を防ぐうえでも有効であった。跡取りの長男が、遺産(主として土地などの不動産)を独り占めしたから、次男や三男は牧師になったり、軍人になったりして身を立てた。

その意味で、英国は不平等な社会でもあった。大陸ヨーロッパの国々では、共同体意識が強く社会保障制度がはやくから発達し、遺産も兄弟間である程度平等に分配された。この点において、英国は西欧の中でも特殊な国であった。男子が居ない家庭では、最も近い親族の男子が相続権を得た。

そのため娘を持つブルジョア階級の父母は、遺産相続権のある裕福な貴族の長男との縁組に奔走した。その長男がぼんくらかどうかは二の次であった。結婚相手を探すために盛んにパーティが催され、舞踏やトランプに興じた。そうした世界で起こる騒動を描写したのが、1813 年に出版されたジェイン・オースチン作『高慢と偏見』である。この小説は「相当の財産を持った独身の男が妻を必要としているのは、あまねく認められた真理である」という有名な書き出しで始まる。夏目漱石は、オースチンの透徹した文章力とストーリーの面白さを激賞した。また文豪サマセット・モームも、同書を「世界十大小説」の一つにあげている。

次いで 19 世紀後半に活躍するのがフローレンス・ナイチンゲールである。彼女は大変な資産家の娘で、両親の二年間に及ぶ新婚旅行の途中、フィレンツェで生まれた。フローレンスと命名された所以である。この当時、看護婦の地位はまだ低かったが、彼女は親の猛反対を押し

切り、自ら志願して看護婦となって従軍し、クリミア戦争では野戦病院長にもなった。

この戦争は、英仏とロシアが、トルコの領土をめぐる争った戦争だが、英仏連合軍は連携が悪く、また厳冬と不衛生によって病死する英仏兵士が続出した。戦死者数よりも病死者数のほうが多かったほどである。派兵部隊を指揮していた英国の将軍の中には、カーディガンとかラグランという苗字の者が居た。毛編物の名称となって後世に名を残したことからすると、この将軍たちは、戦地での武勲よりも、暖かい室内で執務のほうが多かったのであろう。

そうした中でナイチンゲールは、看護団を組織し、病人の統計をこまめに記録して、本国の大物政治家に掛け合い、薬品や食糧の補給と衛生管理を強化した。統計数字で人を説得するという科学的な側面を持った女性として、その経営手腕が高く評価されている。

最後に、英国元首相のマーガレット・サッチャーである。サッチャーは、男性政治家がカッコのよいことを言うだけで、優柔不断なのに業を煮やし、みずから率先して勇猛果敢に構造改革に打って出た。彼女の父親は、ロンドンの下町で雑貨商を営み、たくさん輸入品を販売していたという。だから、英国が生きる道はグローバル経済の中にしかあり得ないということ、彼女は子供のときから皮膚感覚として学んでいた。(サッチャー回顧録による)。

サッチャー政権は、新自由主義を標榜して、英国経済の市場経済化と構造改革を推進した。「新」と呼ばれたのは、19世紀前半、まさにオースチンからナイチンゲールに至る時代に、「元祖」自由主義が先行していたからである。

産業革命を経た英国では、19世紀前半に穀物関税の引下げや、登録主義の株式会社制度など、様々な改革が実施された。1844年に制定された共同出資会社法は、日本の新会社法を始めとして、現代会社法の原典ともなっている。法人格の賦与、株式の譲渡可能性、株主有限責任の原則は、この共同出資会社法を嚆矢とする。1851

年には、当時の産業技術の粋を集めた第一回万博が、ロンドン郊外のクリスタルパレス（水晶宮）で開催された。この万博には、英国各地から観光客が鉄道で大挙して訪れた。株式会社の興隆に伴い、資本家と労働者の対立が生まれ、1848年にはマルクスが『共産党宣言』を著して、ブルジョアとプロレタリアートの闘争到来を宣言した。

しかし、その後の英国経済は、百年近くにわたって低迷した。鉄鋼・石炭・繊維を主力産業とする英国の国際競争力は、1870年頃にはピークを越え、23年間におよぶデフレも経験した。植民地経営とシティの金融に軸足を置いた英国経済は、「ジェントルマン資本主義」とも揶揄され、製造業や工業への関心を失ってしまった。サッチャーが挑んだのは、こうしたジェントルマン資本主義の打破であった。個人主義の悪い面に加えて、「足して二で割る」ことを得意技とする男性政治家が、妥協に次ぐ妥協を重ね、問題解決の先送りに終始したためである。ナチスドイツのラインランド進駐を黙認した英国外交を、サッチャーは「宥和政策」として強烈に批判し、冷戦下の対ソ政策では、前者の轍（ナチスドイツのチェコ進駐を容認した融和外交）を踏まないように檄を飛ばした。

翻って現在、日本経済は長いデフレのトンネルを抜け、新興産業における革新と在来産業における企業統合によって、活力を取り戻しつつある。問題は、いうまでもなく少子高齢化であり、女性の牽引力や高齢者の知恵、外国人労働者の活力などを必要としている。

その際、知的センスを持ったオースチンのユーモアあふれる表現力、指導力を伴ったナイチンゲールの科学的な経営力、市場経済制度の導入に尽力したサッチャーの果敢な実行力は、女性のみならず次代を担うすべての若者にとって、大いに参考になるであろう。